主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

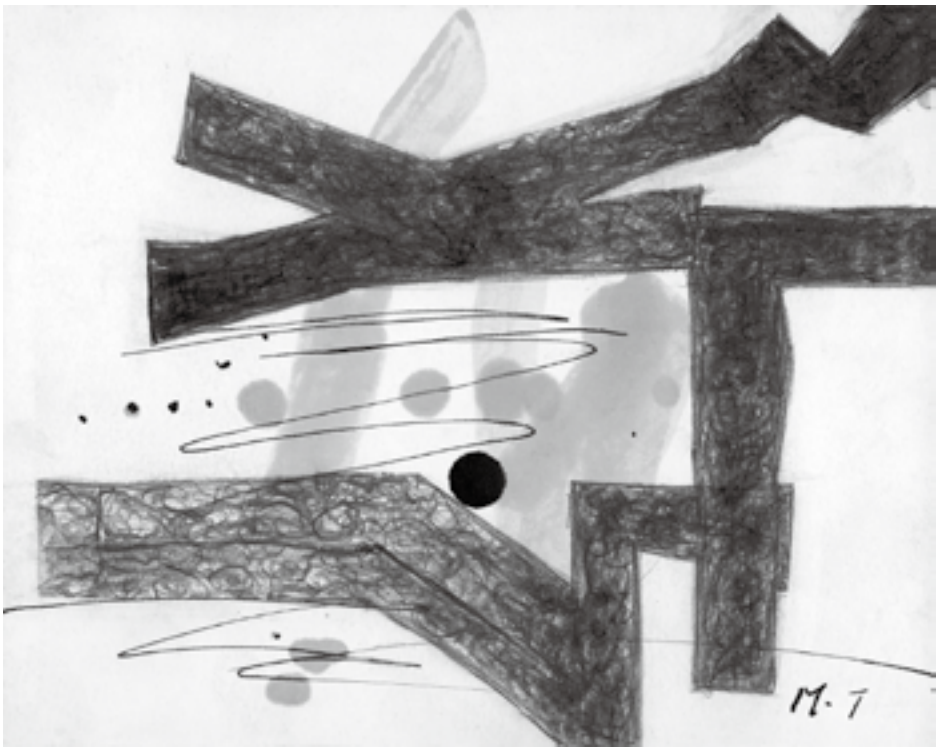
主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子方　TEL / FAX 0297(85)6665

2020.2
No.106

CONTENTS

1p 巻頭言 ……渡辺　良一
2p 第55回記念主体展審査について ……薗田　雅俊
3p 第55回記念主体展陳列について ……續橋　守
第55回記念主体展研究部報告 ……井上　樹里
4p 巡回展報告（神戸） ……森　慎司
巡回展報告（名古屋） ……水谷　幸子
5p 第55回記念主体展 企画展示 ……迯町　勝治
6･7p 第55回記念主体展　研究講演会報告 寺田 農 氏 講演 「父、寺田政明と池袋モンパルナス」 ……榎本香菜子
8p 新会員紹介・入賞者
ART WAVE
9p ●アトリエ訪問 岩井啓二さんのアトリエを訪ねて ……多田　欣子
10p ●各地の美術展から 駒屋アートプロジェクト2019 ……宮林さわ子
●フォトエッセイ ……桑原　雄一
11p ●「私と主体美術」 足立　晋平（京都府） 加藤紀久子（東京都） 鳩貝　悦子（千葉県）
12p インフォメーション 展覧会記録 2020年度事務局体制 2020年第56回主体展日程 編集後記・その他



豊福光行「遠い記憶 ー黒いフォルムよりー」

「更新」

渡辺良一

11月5日午後1時、滅多に鳴らないわが家の電話が鳴る。「主体の藤田です…」　予感がした。主体展への思いについての原稿依頼であった。しかし、私は懇親会に出席して酒を楽しむぐらいで全くといっていいほど主体展の会務に汗を流していない。まして今の主体展という組織の機微もわからない。故にピントが外れた駄文になる事を初めにお断りしておく。

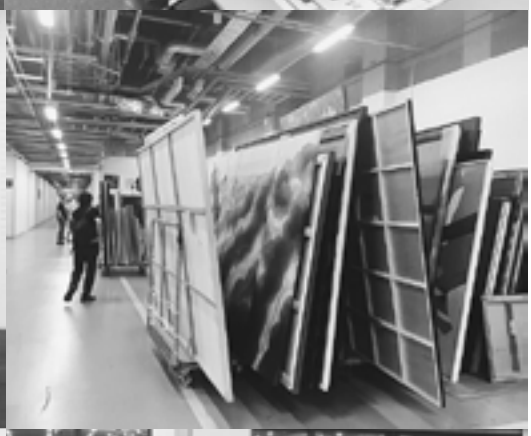
私は東京から約970Km離れた北海道の東にある人口2万弱の美幌町に住んでいる。主体展の初出品は1987年第23回である。主体展に出品する前は公募展にはさほど興味がなかった。東京にいた頃も古今東西の企画美術展ばかり観ていた。故郷に戻り美術誌の技法書を片手に本格的に油彩を描きだした。その当時、地元には絵画グループが4つほどあった。そんな私が公募展の主体美術協会に興味を持ったのは、グループの酒席で過去に独立展会友でもあった方が森芳雄氏の「二人」と言う作品について印象深く語っていたからだ。後に森芳雄氏が主体美術協会の創立会員と知る。更に、美術誌に掲載されていた吉井忠氏と紺野修司氏の記事。吉井忠氏の人としての姿勢に感銘を受け、私の作画する視点のヒントとなった。紺野修司氏の造形に関する記述は当時の私の作画方法をさらに"更新"するきっかけを与えてくれた。このような事が主体美術協会への関心と出品へと繋がった。

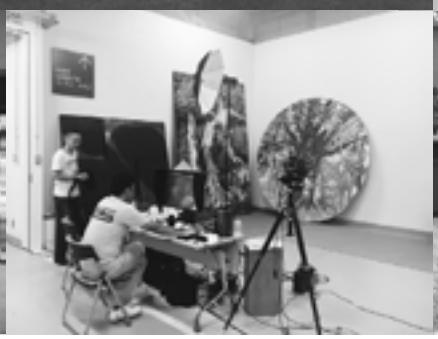
初入選での懇親会は作画する基盤を新たに"更新"する機会となった。今でも強く印象に残っている事は紺野修司氏との会話である。私が「紺野先生…」と発した瞬間、優しい口調で「先生と呼ぶのはやめてほしい。君と私は主体の作家同士なのだから」「え～！初入選の私が!?…」衝撃の一言。また、美術誌に掲載されていた造形に関しての記述を話題にした時「そのことは忘れてください」。この一言は今も強く心に残っている。様々な意味に取れる言葉だったが、その後の言説から作家たるもの"更新"し続けるものだという意味が含まれていたと私は解釈している。

また、小谷博貞氏の「色の量と位置」という言葉は作画する上で今も心に留めている。この初入選時の懇親会での出来事が、サナギから孵化した感覚と、新たな課題を背負い帰路に着いたのを今も強く覚えている。その後も懇親会に出席するたび先輩会員から様々な熱のある武勇伝を聞く。刺激的で面白くもあり、個として自立した作家達が集う主体美術という集団に熱い空気を感じた。主体はまだまだ熱いところがあった。この熱はその後の会員にも受け継がれ、時代と共に"更新"されている事と思う。主体に参加して30年余り、自分にとって主体はどうであったかと深掘りすれば、作家である前に人である事を学んだ。それは生き様であり、時代に対して信念とするところを表現する姿勢であろう。

さて、2019年10月14日に終了した「あいちトリエンナーレ」での事象。ネット上で様々な意見が交わされている。表現者としてどういう態度であるべきかと自問する出来事でもあった。森芳雄氏、吉井忠氏、紺野修司氏は「表現の自由」問題をどう捉え、どう答えを出しただろうと想像しながら筆をおく。

第55回記念主体展報告





第55回記念主体展審査について

事務局展覧会部　薗田　雅俊

第55回記念主体展の審査が令和元年8月23日（金）～25日（日）にかけて行われた。元号が「平成」から「令和」に移って最初の審査となる。

3日間の審査に出席した会員は70名超。会員全員とはなかなかいかないが、それでもこれだけの人数が全国から一つ所に集って出品された作品に対して議論を交わすというのは改めて希有なことだと思う。55回続けば参加者の世代・環境・状況様々であり、ともすれば偏りや隔たり等が出がちだと想像するが、今回の顔ぶれも老若男女満遍なく揃っていた。そしてどの顔からも緊張感と審査に臨む熱を感じ取ることができる。

主体美術の審査に対する基本姿勢は「作品主義」であり、今回もこの姿勢のもと概ね円滑に審査は進められた。また、出品作品に関係するデータ入力に新しいシステムが導入されて事務作業の効率化が進んだことで、より集中して審査に臨むことができた。作品は若手からベテランまで様々な技法・表現・挑戦がみられて興味深かった。若手の作品サイズが小さいことが気になったが、これまで主体で見られなかった新しい感覚や技法が用いられていることが多く、今後の更なる可能性に期待したい。

審査の流れは、一般部門・新人部門の順に行われ、続いて佳作作家を選出する。佳作作家の決定は、候補の声掛けをした会員が責任を持って推薦理由を述べた後、参加者全員でじっくりと審議される。佳作作家の中からさらに秀作作家を選出していく。秀作作家は会員候補の対象となり、8月31日に会員による投票が行われた。

55回審査概況は、入選者132名、佳作作家10名、秀作作家10名、新人賞1名であった。さらに会員投票を経た後、総会審議・承認により8名の新会員が誕生した。

上記「概ね」としたが1点。今回の一般応募作品の中に規定外サイズの作品が出品されていた。これについて審査中かなりの時間をかけて多くの意見・議論が交わされ、総会にも持ち越して討議されることとなった。その結果、作品の可能性を最優先すべきという観点から、「規定外」をなくすこととなり、56回主体展からは号数制限無しで作品を募ることが決定された。

56回展は東京五輪の影響が予想されるため、作品運送・交通手段等各所早めの計画・準備が必要となるだろう。2020年が楽しみだ。

（2019年12月）

第55回記念主体展陳列について

展覧会委員　續橋　守

今から約20年前の1999年2月、“主体展の審査と陳列はどうあるべきか”という重要なテーマについて会員の研究会が開催された。丁度35回の記念展を迎える時期で、主体美術がマンネリに陥っていないのかどうか、創立の理念に照らし合わせながら改めて検証する必要があるとの提案のもと、具体的に審査と陳列に絞って検討することになったわけである。

会場は池袋の豊島区民センター、和室であったため文字通り車座になって北海道から関西迄の会員37名が真剣に討論し合った。時間の制限もあり議論は十分でなかったかもしれないが、内容はパンフ「創立35年記念誌1999」の特集Ⅰ―21世紀に向かって独自に発信する公募展を目指して―に掲載してある。

要点のみ紹介すると、審査については毎年の審査会場の壁に掲示している審査方針の数項目に集約されている。他に作品の入落については会の運営にとらわれないこと、主体を活性化させるのは会員の責任である等が強調された。陳列については陳列係（当時）の役割、可動壁の活用によるジグザグの会場作りと作品中心による展示等、現在にもその精神は引き継がれている。毎年当たり前のように進められている審査と陳列だが、20年前の研究会の結論が基盤になっていることを再確認したい。ちなみにパンフの特集Ⅱは2000年3月の「創立35周年記念企画　北海道展」の関連記事であり、私はこのパンフの編集責任者として関わった。

―第55回記念展の陳列について―

展覧会委員会では始めに次のような基本方針を定めた。

“未来に向けた変化を目指す展示”の共通認識のもと「緩やかな傾向別展示」「会員･一般作品の区別展示」「規定外作品の展示」等を踏襲することとし、企画展示室を設け「寺田政明没後30年、吉井忠没後20年」の特別展示を行う。

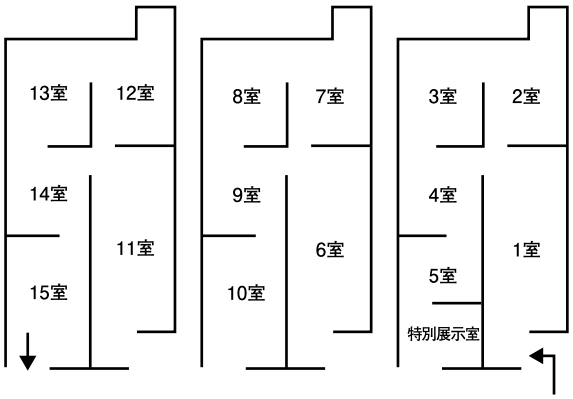
☆**具体的な陳列計画**　･第1～9室／会員作品、　第10～15室／一般入選作品

第1室／規定外作品･創立周辺会員･新会員、　第2室／混合･創立周辺会員、　第3～4室／抽象、　第5室／混合･企画展示室、第6室／規定外作品･新会員、　第7室／混合、第8～9室／具象、　第10室／一般混合、　第11～12室／受賞作品･新人、　第13～14室／具象、　第15室／抽象

8月31日、計画に従って多くの会員の協力により無事全作品を展示した。外部の美術関係者からの評価も高く、主体展らしい内容のある良い会場になったと思う。（2019年12月）

1室

6室



アーティストトーク　9月1日(日)

柴田

水村

会場研究会

トークイベント(15日)

アーティストトーク　9月8日(日)

續橋

前山

坪井

第55回記念主体展 研究部報告

（2019年12月）

研究部　井上　樹里

■研究講演会

寺田農氏「父、寺田政明と池袋モンパルナス」9月1日(日)15時～16時30分まで東京都美館講堂にて開催致しました。(詳細報告は別項をご覧ください)

■アーティストトーク

6年目を迎えた会員によるアーティストトークは、作家の言葉を耳にしながら目の前の作品を読み解くことが出来る会期中ならではのイベントです。制作にかける想いや主体美術で紡がれてきた作家同士の知られざる歴史などをお話いただきました。想いの溢れる語りや作品のフリップ、作品の柄Tシャツを着用してくるなど会員それぞれが来場者とのコミュニケーションを工夫され、作品への理解が深まると共に主体美術協会会員の魅力溢れる時間となりました。

第1回は9月1(日)11時～12時に全国の会員の中から、柴田かよ子氏、水村喜一郎氏にご協力いただきました。

第2回は9月8日(日)14時～15時に関東近辺在住会員を中心に續橋守氏、坪井健一氏、前山陽子氏にご協力いただきました。また本年度は初日午後が研究講演会の為、同日のアーティストトーク開催時間を午前へ変更しましたが、55周年記念展ということもあり全国の会員、出品者にご参集いただき、例年以上に盛会となりました。(氏名記載は五十音順)

■会場研究会

アーティストトーク終了後、両日共に有志会員と来場された出品者によるフリートーク形式での会場研究会を実施致しました。

■主体美術55周年記念トークイベント

9月15日(日)15時～16時30分に東京都美術館スタジオにて「主体創立55年を振り返って」語り手に矢野利隆氏、中村輝行氏(聞き手に榎本香菜子氏)を迎えトークイベントを開催致しました。

会期中のイベントにご参加、ご協力くださった全ての皆様へこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

巡回展報告

神戸展

事務局　森　　慎司

神戸巡回展は10月2日から6日の5日間を会期として、昨年に引き続き原田の森ギャラリーの2フロアーを使用しての開催となりました。会期が昨年の4日から一昨年と同様5日に戻り、入場者数もそれに伴って増加し会員諸氏と出品者の協力の下盛況のうちに終了しました。

美術館の場所･入り口･会場･閉場時間･順路など東京都美術館とは会場配置が違い展示方法も変わりました。エントランスの1階より2階会場のほうが面積も広いためメイン会場と位置づけ、本展とほぼ同様に並べ、1階に規定外を中心とする大作と受賞作家･出品者を展示しました。規定外作品を除き東京都美術館の展示とほぼ同様で、搬入展示もしやすくわかりやすい上に作品も見やすくなりよかったと考えています。多少の不都合も、原田の森ギャラリーも三年目に入ったことで特に会場設営の面で要領もわかり搬入搬出にかかる時間も短縮できてきたと感じています。この会場使用も慣れてきたところですが今回で終了となり心残りもあります。リニューアルオープンからのきれいで明るい会場を三年間続けて使用できたことは幸運なことだったと思っています。

しかし同時に会計的には三年続けて大変厳しい状況が続いています。入場料を有料にするか無料にするかで会場使用料が違いますが、街の人の流れと美術館の立地が連動しておらず、自然な入館者の入場料は有料の場合の会場使用料との差額を越えないと見積もって、今回展も入場無料としました。したがってほとんどの収入は巡回展関係者の分担金で賄わねばならず、負担過多と共にそれでも追いつかずに赤字が累積していることが現在一番の問題となっています。近年の大きな傾向ですが出品者が漸減し続けてきていることで一人一人にかかる分担金の負担が重く、来年以降の京都に会場を戻しての巡回展にむけて、出品者数の回復や展覧会自体のアピールなどをいかにしていくかが大きな課題となります。

神戸展
会場風景

神戸市
原田の森ギャラリー

今回展も遠方からの来場者もあり、この場をお借りして謝意を述べたいと思います。ありがとうございました。

京都市美術館は2020年3月の開館を目指して改装工事中ですが、すでに外見上の工事はほぼ終了し、2019年内から美術館外観は自由に見れる状態です。この機関誌でご紹介した完成予想パース図どおりのイメージで、かつての美術館をよく知る私としては知らない空間にやってきたような違和感と期待感がありました。

美術館の名称がネーミングライツで「京都市京セラ美術館」となりますが、これは愛称であり正式名称は「京都市美術館」であってどちらを用いても問題はないということで、従来の名称に愛着を感じる人々の気持ちや、美術館の外壁に「京都市京セラ美術館」と表示されていることで今後年月を経るにつれ旧来名称に拘ると混乱を招くおそれがあるなど、本会としてどちらを採っていくかは状況を注視しながら考えていきたいと思います。

（2019年12月）

京都市京セラ美術館　本館正面
地下1階部分のファサード

名古屋展

事務局　水谷　幸子

今年は愛知トリエンナーレがいろいろ話題の中に終わり、10月22日（火）～27日（日）愛知県美術館ギャラリーで、第55回記念主体展が開催されました。壁、床、照明がきれいになって今回初めての主体名古屋展です。会員、秀作作家、佳作作家、地元入選作品の全161点が展示されました。

今回、地元中部の中から秀作作家1名、佳作作家1名があり、うち1名が会員に推挙され、これからの活躍を期待したいと思います。

神戸展に続いての名古屋展は10月21日（月）に搬入、展示については東京展の陳列をベースに部屋別の配置図を作成、東京事務所の応援と依頼したアルバイト、中部全員で作品を降ろし飾り付けまで行いました。だんだん大型化する作品の展示には時間ぎりぎりまで作業が続きましたが、皆様の頑張りで何とか時間内に終わることができました。本当に有り難うございました。今回は55回記念展ということもあり、地元の新聞に大きく写真入りで取り上げていただき、3日目位から入場者が伸び、特にシニア層の方に多く来ていただきました。若い方も増え、嬉しい限りです。会期中は会場内で各自の作品の研究会も開きました。これからも色々なやり方で続けていきたいと思っています。

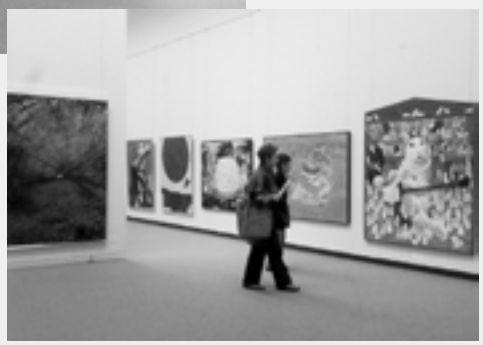
遠方より名古屋展に来て頂いた方、地方のお知り合いに案内や紹介をしてくださった方には、本当に感謝いたします。有り難うございました。毎年のことですが、中部もメンバーの高齢化･作品の大型化で飾り付けが大変になってきています。毎回作業をお手伝いして下さる人を安定的に依頼できることがこれからの課題です。

個人的な希望ですが今回思ったことでは、展示のスペースが狭く、できたらもう少しゆったりと作品が見られたらいいなと…。本展事務所より大学・高校等に案内をして頂いていますが、今後地元でもっと発信し、まずは若い方に美術館に作品を見に来ていただく努力を全員でしていきたいと思っています。次の56回展に向け今回学んだことを参考にして、頑張っていきます。次はどんな作品に巡り会えるのか、楽しみです。最後に関係皆様のご協力のもと、第55回記念主体名古屋展を無事終えることができました。中部メンバー一同からお礼を申し上げます。本当に有り難うございました。

（2019年12月）

名古屋展
会場風景

愛知県美術館ギャラリー



第55回記念主体展　企画展示

「寺田政明 没後30年・吉井 忠 没後20年」

本企画では個人所有者の方々から貴重な作品をお借りすることができ、合計20点の展示が実現しました。通常接する機会のない作品群は観る者に新鮮な感動を呼び起こしてくれました。

寺田政明・吉井忠の両氏は二十歳前後に太平洋美術学校で知合い、以来60年に及ぶ深い交友関係の中で切磋琢磨し合い、主体美術創立時から終生当会の中心作家として活躍されました。

昭和10年代には共に西池袋周辺に点在していた「池袋モンパルナス」と称されるアトリエ付住居に暮らして多くの画友と共に濃密な制作の日々を送りました。

「池袋モンパルナス」は大正時代から昭和20年の終戦頃まで池袋駅の西側から板橋にかけて建てられたアトリエ付の貸家群の総称で多いときには百数十軒を数えたようです。

その頃の生活については、寺田農氏の講演会で興味深いエピソードが語られましたし、宇佐美承の著作「池袋モンパルナス」に詳細が記されています。また劇団銅鑼はそれを原作とした演劇を創作し、表現を変えながら3度にわたり公演しています。更に日本のシュルレアリスムを牽引した画家、古沢岩美の自伝「美の放浪」では内部にいたものならではの数々の出来事が克明に記され興味が尽きません。

板橋区立美術館が2011年に開催した「池袋モンパルナス展」の図録に弘中智子学芸員が書き起こした1936～1945年の吉井忠日記が収録されていますが、歩いていける範囲にたくさんの画家、彫刻家、詩人、小説家などが暮らし、多い時は日に何度も会って語らう生活がどんなものだったか、少なくともSNSなどの発達で何となく「繋がっている」気がする現在とはひと味もふた味も違う人間関係が生まれただろう事は容易に想像できます。

（迯町勝治）

「池袋モンパルナス展」図録

宇佐美 承
「池袋モンパルナス」

古沢岩美の自伝「美の放浪」

「池袋モンパルナス」の日々―吉井 忠の日記から

昭和13年（1938）

2月10日　麻生君、いよいよ13日午後3時ヨコハマ出帆（ハコザキ丸）と決定。夜50銭会費でスキヤキ送別会をやる。古沢氏宅にて。寺田、柿手、吉井、古沢、麻生それに田中佐一郎さん。おれもう一人分の会費出し、田中さん酒一升ぶらさげて来る。なかなかいい気持ちに酔っ払い、出放題の気焔を上げる。矢張り親しい気持ちのわかった友人達の会合には金で表現出来ない雰囲気が出るものだ。夜1時頃帰へる。

11日　快晴　紀元節。朝、寺田とSerpantでcaféのむ。

12日　快晴、風強し　アトリエに寺田君来る。出掛ける。途中柿手君に会ふ。共にSerpantに入る。寺田君と福沢さん所に行く。先生風邪をひいてゐる。夕刻まで話し込んで来る。話がスミズミまで通ずる人だ。寺田君といい気持ちで外へ出る。二人でタイコヤキを買って食ふ。産門会館の政界往来社に彼と行く。有楽町まで戻って彼と別れる。資生堂で里見勝蔵展を見る。いいの二点程あり。

13日　Dimanche快晴、風もなし　午后3時、ハコザキ丸、H級にて麻生三郎横浜出帆。マルセイユに向ふ。海路平安を祈る。吉井、田中佐一郎さん、船が動き出してから寺田、柿手、古沢息を切ってかけつける。船が小さくなるまで見送る。麻生、船中かけめぐって我々に姿を見えるやうにしてる。皆帰ってしまっても波止場に彼の母と妹と二人ぽつんと船を見送ってゐる。イセザキ町辺を歩いて帰へる。ビールをのむ。寺田花束を買ふ。

2011年11月18日　板橋区立美術館発行「池袋モンパルナス展」
吉井 忠の日記（1936-1945）弘中智子氏書き起し　より抜粋

（注釈）

麻生　三郎　あそう･さぶろう（1913-2000）
東京都生、独立美術協会、美術文化協会、新人画会、自由美術家協会

古沢　岩美　ふるさわ･いわみ（1912-2000）
佐賀県生、独立美術協会、創紀美術協会、美術文化協会、日本アンデパンダン展

柿手　春三　かきて･しゅんぞう（1909-1993）
広島県生、独立美術協会、創紀美術協会、美術文化協会、自由美術家協会、日本アンデパンダン展

田中佐一郎　たなか･さいちろう（1900-1967）
京都府生、帝展、1930年協会、独立美術協会

福沢　一郎　ふくざわ･いちろう（1898-1992）
群馬県生、帝展、二科会、1930年協会、独立美術協会、美術文化協会

里見　勝蔵　さとみ･かつぞう（1895-1981）
京都府生、二科会、1930年協会、独立美術協会、国画会

靉　　光　あいみつ（1907-1946）
広島県生、本名は石村日郎、二科会、1930年協会、独立美術協会、美術文化協会、新人画会

井上長三郎　いのうえ･ちょうざぶろう（1906-1995）
兵庫県生、二科会、独立美術協会、美術文化協会、新人画会、自由美術家協会、日本アンデパンダン展、自由美術協会

Serpant（セルパン）　池袋駅西口にあった喫茶店

第55回記念主体展　研究講演会　2019年9月1日(日)　15:00〜16:30　都美術館講堂

「父、寺田政明と池袋モンパルナス」

寺田　農(てらだ・みのり)氏/俳優

2019年は主体美術55周年であると同時に、寺田政明氏、没後30年にあたります。そこで御子息の俳優、寺田農氏に作家論とはまた違った視点から語っていただきました。

左から靉光、寺田政明、吉井忠(昭和18年)

主体美術55回展おめでとうございます。また企画室では父の作品を展示していただき、この場をお借りし御礼申し上げます。

・・・・・・・・・・・・・・

さて、父寺田政明は1912年(明治45年)1月3日、北九州八幡で、11人兄弟の次男として生まれました。長男が早く亡くなりましたから実質上長男的存在でした。政明の父親は八幡製鉄所に勤め極めてまめであったので父も似て何でも自分でできた人でした。　一方母親は自由奔放な人でした。この時代は兵隊さんか八幡製鉄所の職工さんとして働くような時代でしたが、父にとり大きな転機が訪れます。尋常小学校2年の時、蛍採りで崖から落ち右大腿骨複雑骨折し7か月入院。

「私は小学生の時に蛍採りで崖から落ち怪我で足を悪くした。…母が私のことで父から叱られているのを見て私は悲しくて死にたいと思った。その私を強く惹きつけたものがあった。それは病院の庭で日曜の休みいつも絵を描いている若い医者の姿であった。…　筆の先から現れる形と色、大袈裟に言えばそのなかにこれからの私の人生があると感じたのである」

北九州の八幡は煙突の連立する煙の街で、煤煙は政明の健康も害し喉をやられてよく咳き込んでいました。しかし絵を描くようになると、真っ黒の煙さえよく見ると実に変化し多彩。煙の色は複雑で面白く絵になる、と書き記しています。夢中になって不自由な足で色々なところに行き絵を描き続けていました。

中学を卒業し、本格的に勉強したい、それには東京に行くしかないだろうということで父、寺田政明は16歳で両親の反対を押し切って上京するわけです。1928年の東京というのは、関東大震災の5年後で復興に燃えているところでした。同舟舎絵画研究所を出て18歳、太平洋美術学校本科生に入学。(写真/髪が天然パーマの政明。死ぬまで母が散髪し床屋には行かなかった)当時、おんぼろの辻ハウスに住んでいました。この頃、終生を共にする鶴岡政男、松本竣介、麻生三郎、吉井忠に出会います。近所の茶房りりおむによく集まり、長谷川利行、靉光、大野五郎さんとも出会う。父は靉光さんとはとても仲が良くあいみつさんではなく、あいこうさんと呼んでいた。ですから私もあいこうさんと呼ばせてもらいます。

1960年11月号美術ジャーナル「生き物との対話」では、北九州八幡から単身出てきた父が追究意欲と芸術意欲を内に燃やし語り合える仲間と刺激しあい自分をつかまえることでいっぱいだったと語っています。父はマンドリンにも夢中になりました。今ならエレキギターといったところですね。面白い話があります。北九州に帰ったときにマンドリンを見た母親から「なんね?」と聞かれ、「友達のを借りた」と言ったらそこに寺田、という名前が書いてあったのですね。母親は字が読めなかったのですが寺田と言う字くらいはわかり、ばれたとか。あいこうさんもよく女装し実家に帰ったものだから2度と帰ってくるなと親戚中から言われたらしい。当時の人はいかに自由であったか。

・・・・・・・・・・・・・・

1931年、第1回独立美術展が開催されます。その年には満州事変があり、翌年には満州国建国、太平洋戦争の幕開けとなっていく、そんな時代です。在野として結成された独立美術協会には佐伯祐三、里見勝蔵、林武さんとかすごい人がいてフォービズム運動が核をなします。同年に福沢一郎がフランスから、シュールレアリズムという美術運動をたずさえ帰ってきます。父は20歳の時に「風景B」という作品で独立2回展初入選。1933年21歳で長崎アトリエ村に移り住みます。

平塚市美術館の土方明司さんが書かれていますが、アトリエ村とは昭和6年に池袋周辺の長崎町・要町にできたアトリエ付貸家群のことで資産家が画学生の孫のために作ったものが仲間内で評判となり借家として建ったことがはじまり。広大な敷地に200位のアトリエ。家賃は相場の半額。それでも貧しい画家たちは、家賃滞納。どのくらい払っていないかとお互い話しているところに夕方突然家主さんが現れる。制作していると聞くと「いや、いや、いや、それはお邪魔ですな」と帰ってしまう。今では考えられませんよ。

このアトリエ村にカルチャー・リーダー、北海道小樽出身の小熊秀雄がいて32歳、父21歳。大変気が合った。小熊秀雄の絵、「夕陽の立教大学」(現在豊島区が所蔵)このタイトルは父親がつけたそうです。小熊さんは詩人ですから父親の絵具やキャンバスを使ってずいぶんお描きになっている。そして小熊さんの最初の詩集が1935年、当時豪華本で1円80銭で出版されます。出版社に見本をもらいにいくと二人ですぐに古本屋に持って行く。発売より前に古本が先に出る!(笑い)、それで二人で飲んじゃったという話があります。この詩集は中野重治に大変評価されて小熊さんは詩人として名前を上げていくわけです。小熊さんが父親に与えた影響というのは凄いものがあります。

さて、なぜ長崎のアトリエ村を池袋モンパルナスと呼ぶようになったのか。1938年小熊秀雄がサンデー毎日で「池袋モンパルナス」と称してエッセイを載せています。…売れもせず、ただ制作する、画家、彫刻家、小説家、詩人たち全ての生活状態は似たようなものだった。遠く池袋の空、夜の光を反映して美しく見える頃、画家たちはパチリパチリと電燈を消して長崎町から池袋に出かけていく。

"池袋モンパルナスに夜がきた
学生、無頼漢、芸術家が街に出る
彼女のために神経を使へ
あまり太くもなく、細くもない
ありあはせの神経を"…

こう小熊さんは書いて、以来池袋モンパルナスという言葉は定着します。しかし長崎アトリエ村に住んでいる父親をはじめ住人は池袋モンパルナスなんて言ったことがない。いわゆるパリのモンマルトルに対してモンパルナスはダウンタウン。東京でいえば上野がモンマルトル、池袋湿地帯がモンパルナス、こういう意味で小熊さんは揶揄といいますか、ひややかな目で、パリも行ったことがない芸術家たちを皮肉ったところがありますね。

このあと1937年25歳の父親は第7回独立展で「街の憂鬱と花束」で独立賞を受賞します。上京から9年、初めて絵描きとして認められていった。ますます精力的に描き、翌「芽」という作品を発表。父は26歳のとき結婚をします。同じ八幡の出身、米屋の娘さん。当時の芸術家はたいてい手に職をもったしっかりした奥さんと一緒になっていますね。そういう人がちゃんと支えてくれるから自分は絵だけに専念できる。

この頃からシュールレアリスムの絵で、小熊秀雄さんの影響だと思いますが、タイトルがかなり文学的になります。「魔術の創造」「宇宙の生活」「夜、眠れる丘」「月夜の開拓」、「風景B」なんて初期のタイトルとは違いますね。1938年4月、寺田政明をパリにやろうではないかと福沢一郎さん、瀧口修造さんが応援してくれます。今でいうクラウドファンディングのようなものですが目標は700円。ところが実際集まったのは10円だった。10円はどうしたかというと雨漏りを直して後は飲んじゃった(笑)。こういう形で断念します。この先パリの地を踏むのに25年半かかるんですね。

1938年、ますます戦争というものに世の中突入していくわけです。1939年独立9回展の審査を巡り大荒れに荒れ取っ組み合いの喧嘩。父親は大火鉢をひっくり返しそれで灰神楽。以後、灰神楽の寺田と異名をとるくらいに、血気盛ん。吉井さん大野さんは年上、同じ年は松本竣介だけなんです。そういう意味では先輩方が可愛がってくれたこともあるのかもしれません。この年に福沢一郎さんは独立を脱退して美術文化協会を結成。アトリエ村の若い絵描きたちはこぞって参加するわけです。

しかし1941年4月福沢さんは特高警察に逮捕され7か月間入る。後に文化勲章をお取りになった時の有名な一言「牢屋に入れたり、勲章くれたりお上のやることはよくわからない」と。この年1941年12月8日太平洋戦争に突入します。

・・・・・・・・・・・・・

1942年、お待たせいたしました(笑)私の誕生となります。父は子どもの頃の姉と私の絵はずいぶん描きましたが、飽きちゃったのか妹の子ども時代の絵はあまりないんですよ。父親は姉をなっちゃん、妹をふみ君、私はのう君。小言を言うときなんかふつうの親は呼びつけになるんだけど必ず、のう君。怒られたのは、たった1回だけ。小学校の時に釣り銭で飴買ってしまったのを「お釣りくれなかった」と言ったら、父親は「そんなことはナイ!」と半ズボンはいていましたから、腿にでかい手でバーンと思いっきり叩かれて、2,3日手の跡がついているくらいでした。写真を見ても姉弟、子ども達は明るく笑っていますが、社会状況は厳しい時代です。

1942年「夜の花」(東京都現代美術館が所蔵)、そして1943年「絶命」。当然このような作品は反戦思想のもと公開禁止でした。福沢さんなど捕まっていますが、母親が言うには、特高警察が毎日うろついていましたが顔見知りになって、「こいつらは絵を描かしておけば別に何も言わないんだ」ということで和やかな関係だったと言っていました。

1943年戦争一色の頃ですね、新人画会というものを井上長三郎、靉光、糸園和三郎、麻生三郎、大野五郎、鶴岡政男、松本竣介そして父、8人で結成。1944年3回展、あいこうさんは出征する前に「白衣の自画像」を託し絶筆となります。多くの絵描きが戦争にとられる中で、足が不自由な自分でも何か役に立ちたい、今できることをしようと中支(中国大陸中部地方)に絵画慰問に行きます。この時にあいこうさんの消息を探し、500キロ先にいるとわかったがどうしても会えなかった。あいこうさんは上海の病院でアメーバ赤痢で亡くなりますが、実情は餓死だったと聞いている。後々まで父は無理してでも会いたかったと言っておりましたね。

1945年終戦を迎えますが、父は肺炎で生死をさまよいます。アトリエ村近くに住んでいた社長さんがペニシリンを手に入れてくれて助かりますが、この肺炎で亡くなっていたかもしれないというほどの重篤な状態でした。

池袋モンパルナスを後にして板橋区前野町、ひぐらし谷と父がつけた所に移り住みます。1947年、新人画会メンバーは自由美術家協会に移りますが、父は1949年に移るわけです。その年の「前野町附近」という絵は、子ども時代に覚えている私の原風景です。

38歳、この頃、墨彩を始めます。これが後に挿絵で大変活きてくる。1950年作「灯の中の相談」(新潟市立美術館)。解説には6月朝鮮戦争勃発、作家の社会的視線を感じるとあります。「灯の中の対話」、ロウソクの前でネズミが2匹。小熊さんが亡くなったとき停電でロウソクを灯した、その通夜をイメージして描いたそうです。私の好きな作品です。1951年作「早晨の集まり」。これは1969年、野坂昭如さんの「骨蛾身峠仏の葛」の装丁になりました。

・・・・・・・・・・・・・

1954年42歳のときに大きな転機が訪れます。人生劇場の尾崎士郎さんから挿絵を頼まれる。二人で取材旅行もし「小さなものから無限大の作品を生み出すんだ。何でもないものが絵になり何でもない物が小説になる」こう言われた。10年間、壇一雄、司馬遼太郎、小川未明他挿絵を描き続けていま

したがバッタリやめるわけです。尾崎士郎さんが亡くなったこともあるが母親の本業の絵を描かないと、の一言もありました。

1963年51歳、初めてパリに行きます。7ケ月滞在。帰国して翌1964年は東京オリンピック。吉井忠、大野五郎、森芳雄と自由美術家協会をあとにして主体美術協会を結成します。初期の「灰骨を見せるドーム」「筑豊のボタ山」「死んだ漁船第五福竜丸」などの作品を見ますと、社会に向ける眼というものを感じますね。今生きていたら、原発事故など、どう描いたかと思います。朽ちたものが好きで廃船も好き。働き続けて傷だらけになり棄てられたものでもその中に荒波を生きてきた骨格があり…時間の経過を含んだ骨格を私の造形にしたいと語っています。スケッチにはよく行っていました。晩年は小熊さんの故郷、小樽に惹かれよく行っていました。

うちは蚊がすごいの、でも夫婦はさされないの。洲之内さんなんか、なんで飼っているんだ、と。何しろ生きているものすべてに優しい人でありましたからね、ボウフラにも優しかった。

“デッサンができとらん”とは父が、よく好んで口にしていた言葉です。デッサンというものはただの下書きではない。朝起きると、母親が食事の支度をしている、椿でもなんでも花をパッと描く。新聞折り込み広告裏にだーっと描き出す。両面広告があると大変怒っていましたね。くだらん、と(笑)。

デッサンというくらいだから本業の絵の世界ではしょっちゅう使われた。若い人の作品の感想を求められて、ただ一言「デッサンができておらんぞ」と。では父にとってデッサンとは何だったんだろう。基本などという単純で生易しい言葉ではなかったのではないか。ですから若い絵描きのデッサン力のなさは到底許されるものではなかった。父は日常生活でも酒に飲まれて醜態をみせたときなども「デッサンができておらんぞ」こういう。この場合、しっかりと自分の足元を見て真っ直ぐ前を見て生きていく姿勢のことではなかったのか。

・・・・・・・・・・・・・

癌におかされ残されたわずかばかりの時間、夜半に自らの顔を自画像としてデッサンしていた父。父にとってのデッサンとは前に向かう姿勢であり、絵描きとしての生きることそのものであったのだろう。

父は、冬に耐えて芽吹いていく木が大好きなんですね。樹木の絵を沢山描いています。1988年「樹炎」絶筆の作品です。命の限りを燃やし続ける、そういう感じです。最後まで出身地の九州が大好きでね、ことあるごとにしょっちゅう帰っておりました。工業都市、関門港。戦時中は写真撮影も写生もとんでもない時代でした。「関門港叙詩」この絵には、生涯にわたり描き続けたモチーフすべてがあります。

・・・・・・・・・・・・・

“描く故に我あり”　平成元年7月12日、77歳で亡くなるわけです。絵を描く喜びがあるから自分は生きていけるんだ。生きているから描くんじゃないんだ。明治最後に生まれて大正、昭和まるまる生きた人なんですね。「無限に手を延ばし　わたしは風が吹くように生きたい」ありとあらゆるものの命、生命を描き続けたんだと思います。ありがとうございました。

講演を終えて

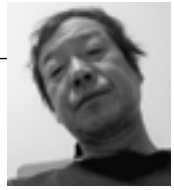
研究部　榎本香菜子

今回は年代を追ってスクリーンに次々と映し出される寺田政明氏の絵、お若い頃の貴重な写真を見ながら、俳優である農氏の素晴らしい語りを拝聴するという誠に贅沢な1時間半となりました。16歳で上京し同じ志を抱く画家仲間との出会い、その青春群像はとても純粋で熱く魅惑的です。ウサギを抱いた農少年の家族写真が美しい。全ての命を大切にしつつ、激動の昭和を果敢に生きぬき、亡くなるまで描き続けた魂の崇高さ、強靭さ、豊かな詩心が強く迫ってきた感動的な講演会でした。

2019 NEW MEMBER　新会員紹介

※新会員の最新作品は第55回記念展の図録、またはホームページでご覧ください。

猪熊　修　INOKUMA osamu



■出身地　新潟県
■制作に使う主な素材
建築資材（内装･外装などの資材）主に下地に使用し、さらにアクリル、油絵具、蜜蝋など。

■自作について　45年前に主体美術の創立時の事務局長であった中島保彦先生から絵を教えてもらいました。こわい顔をして口数の少ない先生で、技法的な事は何も言わずに、ただひたすら「絵は実感なんだ。描こうとするものと、自分自身を真剣に重ね合わせる事だ!」と酒を飲んだ時も飲まない時も何度もおっしゃっていました。うまい･へたではなく本当の絵の価値がそこにあるかもしれないと思いながら描いています。

落合梨乃　OCHIAI rino

■生年月日
1998年3月23日生
■出身地　千葉県
■制作に使う主な素材　油絵具

■自作について　私はまだ画のスタイルが決まっておらず、試行錯誤しています。日々の人との関わりを思い出して感じた、虚しさや切なさを非現実的な世界観で物語を紡ぎながら描いております。虚しさや切なさはマイナスの感情ですが、人間がもつ一つの愛おしい感情でもあります。ですから、今は美しく描いていきたいと思っております。

菊地史津　KIKUCHI shizu

■生年月日
1948年4月19日
■出身地　東京都
■制作に使う主な素材　アクリル

■自作について　ザクロや無花果やリンゴ等身近な果物をモチーフにそこから想像やイメージを膨らませて描いてきました。そしてドラゴンフルーツに行き着きました。数年前にはなかなか見かけることがなかった果物ですが最近では家の近くのスーパーにも売っています。いつの間にかこんなに日本に入って来たのか。そしてその存在をあまり気にもしていない人々。そんな情景を絵にしてみました。何事もなく日常生活を送る人々、この平和な日常がずっと続くことを祈りつつ。

瀧安順子　TAKIYASU junko

■生年月日
1954年6月29日
■出身地　広島県
■制作に使う主な素材　油絵具

■自作について　私の住む福山に鞆の浦という漁港があり昔から風景画を描いてきた。スケッチに訪れた際いつものパノラマから目をそらすと係留された船の影が海面に映し出されていた。その美しい波紋に魅了されて以来、連綿と流転する波に人生を重ね合わせて描いている。災害、病、死など予測不能な現実に生き不安や悲しみに翻弄されるが、感情や思いをキャンバスにぶつけることで自分自身を鼓舞してきた。これからも絵を心の拠り所にして描いていきたい。

新野安紀子　NIINO akiko

■生年月日
1962年3月20日生まれ
■出身地　山口県
■制作に使う主な素材　主に油絵の具

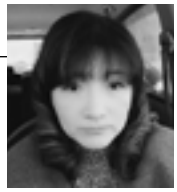
■自作について　私はたいして珍しくもない風景を描いています。その風景に出会った時の五感を通して感じたものを表現することは難しいのですが、今テーマにしている「道」は、その道がたどってきた時間の経過などを客観的に体現しやすいものなのです。これからもたいして面白くもない風景になるかもしれませんが、見た目の景観に引っ張られない即物的な表現で、でも何か奥深いものがにじみ出るような絵を描いていきたいです。

平田　誠　HIRATA makoto

■生年月日　1949年6月
■出身地　神奈川県
■制作に使う主な素材
アクリル、自作キャンバス

■自作について　廃てられた鉄路を描き続け、最近気づいたこと。それは自分の絵の中に石と鉄と木が大地にへばりついている様。石と鉄と木は、100万年以上前、原人の頃から石器、鉄器、木器から始まり、20世紀までの生活や産業など、あらゆる形で大きな役割を果たしてきました。しかし21世紀デジタルテクノロジー社会が加速し始め、人の心も社会、風景、価値観なども20世紀までとは全く異なる時代に人類を変え始めています。自分は感性が古いのか、この消えてゆくアナログな廃鉄路を見るとなぜか魅かれ、心を動かされてしまいます。

三浦順子　MIURA junko



■生年月日　5月17日　**■出身地**　青森県
■制作に使う主な素材
･キャンバス時、油絵具（ホワイト以外）主にクサカベ
･ベニヤパネル時は、水性塗料（ペンキ）、アクリル絵具、工事用の砂を併用

■自作について　貧しいけれど皆、生き抜くために必死で夢、希望が溢れていた時代。怪しい中にも楽しさがあり、輝いていた昭和。自分が育った、駅前は飲み屋街が沢山あった。昼から、下半身を露出したオヤジに追いかけられたことも今では懐かしい。様々な、人間模様があり私の絵は、ここから始まったといっても過言ではない。老朽化、世代交代とともに汗、涙、笑いが刻まれた建物が次々と思い出が解体されていく現代。それを、絵に残し伝えていく。それが自分のテーマだ。自画自賛でいい、人目は気にせず描きたいものを描き続けていきたい。

水谷重人　MIZUTANI shigeto

■生年月日　1952年6月17日
■出身地　愛知県名古屋市
■制作に使う主な素材
アクリル絵の具

■自作について　絵を描く時は常に恐怖だ。本当に絵が出来上がるのかという不安から制作が始まる。絵を描き出すまでに、恐怖を克服するため数日間かかる。その後エスキースに従い描き出すわけだが、これからが戦いだ。試行錯誤してスポンジ、筆、ナイフなどを使い絵の具を塗りつける。そんな時、偶然に形が見えてくることがある。その偶然を大事にして形を作っていく。偶然がよく出てくる時は調子がいいのか作業が進む。今回の作品はこれがあり何とか描き上げました。

第55回記念 主体展 入賞者

会員推挙・秀作
猪熊　修（山形県）
落合　梨乃（千葉県）
菊地　史津（東京都）
瀧安　順子（広島県）
新野安紀子（埼玉県）
平田　誠（神奈川県）

8名
三浦　順子（青森県）
水谷　重人（愛知県）

秀作 2名
戸田　礼子（東京都）
鳩貝　悦子（千葉県）

佳作 10名
太田　琴乃（千葉県）　肥田野紅実（広島県）
加藤紀久子（東京都）　日向由美子（埼玉県）
河内　一（新潟県）　山本　弘子（愛知県）
佐藤　良克（神奈川県）　渡部　尚子（埼玉県）
西森　聰子（和歌山県）
長谷川好美（千葉県）

新人賞　1名
肥田野紅実（広島県）

損保ジャパン 日本興亜美術財団賞
福田　玲子（茨城県）

アトリエ訪問 vol.5

岩井啓二さんのアトリエを訪ねて

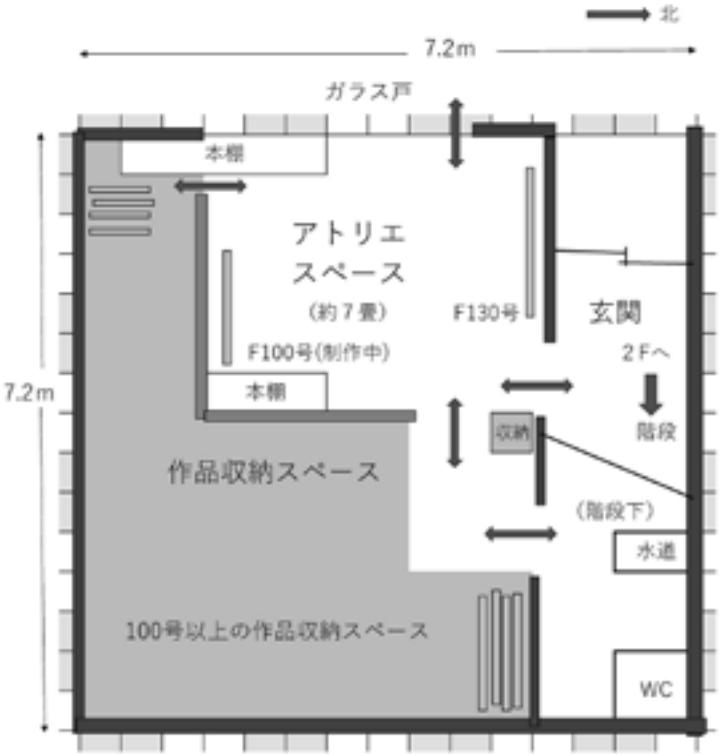
群馬県高崎市

取材･文／多田欣子　　構成／藤田俊哉

遠くに見える浅間山は、うっすらと雪をのせ、南には白衣観音が神々しく立っている。群馬県高崎市、ある晩秋の冷え込んだ日、この地に住む岩井啓二さんのアトリエをお訪ねしました。岩井さんのお住まいは駅から7分程の静かな住宅地にありますが、周りは高齢化による空き家が目立つそうです。ここで岩井さんの個性に満ちた独特の作品が、どのように生まれてゆくのか大変興味をもってお話しを伺いました。（多田）

▲制作中の絵と岩井さん
◀収納スペースの一部

■岩井啓二さん作成のアトリエ図



玄関を入るとすぐにアトリエ。スペースは7畳ほど。そこにはF100号の絵と制作途中のF130号の絵が向かい合って置かれていました。壁には小品が数点飾ってあり、大きな本棚や机、画材道具等、静かな部屋は制作に集中できそうでした。隣には広い作品収納部屋があり、大量の絵画作品が収まって長年制作を続けてきた様子を伺い知ることができました。

■絵を描こうと思ったのはいつ頃ですか。

高校生の頃、ある建設会社の社長（山口薫の後援者の一人）が文化的なことに熱心で、他の生徒と一緒に絵について教えてもらいました。当時は水彩画、パステル画でした。その後、理系の私大に進学して東京都東久留米市に住み、偶然、森田六男・る以子さんご夫妻のお宅のそばで大変お世話になりました。恐る恐る「油絵」というものを描き始めた頃です。

■影響を受けた方や、心に残る方たちがいますか。

卒業後高崎市に帰り、当時主体の会員であった松本忠義さん、豊田一男さんにもいろいろと教えていただきました。特に松本さんには、氏のレポート作成（市立図書館に寄贈）や、作品集の作成などを通じて影響を受けました。山口薫が高校の大先輩だったこともあるかも知れません。ちなみに松本さんも豊田さんも、山口薫の二年後輩です。市役所には山口薫の壁画「朝･昼･晩」（現シティギャラリー常設）があって、主体展に出すようになってから以前より興味を持って見るようになりました。

■主体展に初出品したのはいつ頃でしたか。

第11回展（1975年）でした。初めて描いた100号1点が初入選でした。今も大事にしています。最初から抽象傾向の作品で、今も変わりません。

■技法、材料、モチーフやテーマ等についてお聞かせ下さい。

シナベニヤのパネルにテレピン油で描いて艶が出ないようにしています。色はコバルト系の青が中心で、カドミウム系の黄色、赤を使い混色はしません。マチエールが厚かったのですが、ここのところ薄くなっています。また抽象画に魅かれ、そうした方向で制作を継続してきました。行き当たりばったり、暗中模索の中に居ます。漠然と心の奥にある問題…夢とは何か、原子はどんなふうにできているか、宇宙はどう始まってどう終わるのか…など、とりとめのないことを考えながら制作を続けています。

制作中の絵について、夢を見ることがあります。色付きの夢を見る人は多いと聞きますが、動く夢もまた見ると嬉しいと思います。絵のテクスチュア、色、イメージの重なりなどが、目の前をスクリーンに映し出されるように展開していくことがあります。これらすべてが記憶に残るわけではありませんが、それは非常に直接的な経験として感じられます。

制作途中のこうしたいわば「夢のみちびき」が、行き詰っている作品の展開の契機となることを期待し続けています。

■好きな作家を挙げてください。

セザンヌ、ゴッホ、マッタ、F･ベイコン、現代の抽象傾向の作家。日本画にも興味があり、俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一、長谷川等伯など。

■主体展の魅力はどんなものでしょうか。

主体展しか知らないのですが、懇親会などで皆さんが「上下の関係が無い」「先生と呼ばない」などと話すので、そうしたことが魅力かと思います。また、若い会員の方が増えてきたと感じられるので、それも魅力だと思います。

以上のように制作するためのこと、今まで歩んできた道や、想いについての言葉を岩井さんはいろいろと準備しておいて下さいました。静かで穏やかな岩井さんの心の奥に強い信念を感じとれたアトリエ訪問でした。

各地の美術展から

このコーナーでは、全国各地の美術館やギャラリー等で開催された企画展・特別展などを紹介していただきます。

「地域とアート、もうひとつの出会い KOMAYA ART PROJECT 2019」

駒屋アートプロジェクト2019企画・出品　宮林 さわ子

平成15年に愛知豊橋市の有形文化財に指定された「商家・駒屋」（JR二川駅前、旧東海道沿道）を会場にして、2019年11月16日（土）～24日（日）の期間、今回で2回目となる「駒屋アートプロジェクト2019」を開催いたしました。

今回は県内外から平面・立体・工芸など様々な分野の11名の作家が参加して、内容・ジャンルを一新。初参加の作家も多く、駒屋の空間を生かした意欲作を展示することができました。おかげさまで会期中は約4000名の来場者があり、多くの方が美術館や画廊とはちがった新鮮な驚きを感じることができたかと思います。

関連イベントとして、地元の商業施設のご協力による「まちなか出前ギャラリー」を1ヶ月間に渡って開催。この他、「ショートムービー動画塾」「作家作品とダンサーとのコラボレーション」や現代陶芸家の作陶茶道具を使った「アート茶会」などを企画し、楽しい出会いの場を創出しました。

このような活動は一個人の熱意だけでは成り立つものではありません。継続させるためには作家の芸術に対する並々ならぬエネルギーと、二川宿の歴史的遺構を大切にしたいとの思いが必要だと感じます。今後も「えんがわボランティア」などの応援団、行政の資金面での援助、企業協賛など多方面からの支援が続けば、二川本陣資料館、商家駒屋、古民家を結ぶ大きなアートプロジェクトへと成長するのではと期待しています。加えて、多くの人が訪れ、交流の輪が広がることを願っております。

11月にこのプロジェクトを終えて思うことは、芸術は一部の人だけの為でなく、多くの人に開かれたものであるということ。主催者としてそれを実感できたひと時でした。

フォト・エッセイ

会員諸氏に日々の生活や趣味、または作品制作にまつわる裏話など、多彩な話題のエッセイをお願いしています。写真と共にお楽しみください。

東京文化会館の思い出

桑原　雄一

ジョージ・セル

楽団員のサイン入りプログラム

中学生のころ、初めて聴いたクラシックコンサートの会場が東京文化会館であった。最近は、音楽専用ホールが増えたので行くことが少なくなったが、ここのホールには数々の記憶に残る名演奏や迷演奏がある。そんな、はるか昔を思い出すままに綴ってみた。

上野駅の公園口を出て、信号を渡ると目の前にある建物が東京文化会館だ。大ホールの客席は5階まであり、内部はバルコニーに囲まれたオペラハウスを思わせる。初めて実演を聴いたときには音のすばらしさに驚愕した。その頃のコンサート会場は多目的公会堂が多く、ほとんど残響がなく、素っ気無いもので、およそクラシック音楽には適さなかった。

1970年、大阪万博の年、東京文化会館で一生忘れえぬ素晴らしいコンサートを聴いた。ジョージ・セル指揮のクリーヴランド管弦楽団で、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」。その音楽の迫力に圧倒され、更にアンコールで演奏されたラコッチ行進曲では大きなホール全体が揺れて、めまいのような感覚を体験した。一糸乱れぬアンサンブル、圧倒的な音量、素晴らしい加速等、当時のセル／クリーヴランドはカラヤン／ベルリンフィルと肩を並べる世界トップクラスのオーケストラであったと思う。終演後、文化会館の通用口で待ち構えていると、眼鏡をかけた長身のセルが現れ、穏やか表情で軽く会釈し、迎えの車に乗った。しっかりガードされていて、サインをもらうことは叶わなかったが、後から現れた何人かの楽団員からはサインをもらうことが出来た。残念ながらセルはこのときのツアーが最後の演奏となった。同行していたピエール・ブーレーズはセルが高く評価していた指揮者・作曲家で、ガンを患っていたセルが、万一指揮台に立てなくなった時のために同行していたことを音楽雑誌で知ったのはずっと後の事だった。

旧日本フィルハーモニーが分裂する直前のコンサートを聴いた。曲目はマーラーの交響曲第2番「復活」、指揮は小澤征爾。生演奏でのマーラーは初体験。第5楽章、打楽器総動員でクレシェンド、最強音に達し金管楽器が炸裂するところでは、戦車が乱入してきたのではないかと思うような凄まじい地響きのような音に度肝を抜かれた。その後、この楽団は新生の日本フィルハーモニーと新日本フィルハーモニーとして正 に「復活」した。最後に選んだ曲が良かったか。

山本直純の指揮でブラームスの交響曲第1番を聴いたときのハプニング。第4楽章後半の聞かせどころで、大きな身振りでめいっぱいタクトを振り上げた瞬間、タクトが宙を舞いコンサートマスターの脇に落ちた。黒縁眼鏡に髭がトレードマークの同氏が気球のゴンドラで「大きいことはいいことだ」と指揮をする森永エールチョコレートのTVCMを思い出した。演奏は熱い名演であった。ブラームスの第1番は指揮者を熱くする。

山本直純

「私と主体美術」

**主体展との出会いは何だったのか。またこの展覧会の魅力とは‥？
これまで継続して出品を続けて来られた方に「私にとっての主体展」について、それぞれの思いを綴っていただきます。**

足立　晋平（京都府）

子供の頃から絵描きになりたかった私は、転職を機に子供の頃の夢を叶えようと、その為の方法を色々と思い悩んだ末、公募展に出品するのがベストな方法だと自分なりに考えました。

そして次は出品する公募展選びでした。

どの公募展に出品するか、京都･神戸そして大阪と公募展をみてまわり、その中で一番魅力的だったのが主体展でした。

何処がどんな風に魅力的だったかと聞かれても上手く言葉に出来ませんが、他の公募展と違って何か心に残るものがあり、「主体展しかない!」と即決しました。

その即決から20年以上、我ながらよく続いていると思います。

その理由の一つは会員や出品者の方々の作品に対する真摯な姿勢がその作品を通して見る側に強く訴えかけてくることと、自分もそういう作品を発表したいという思いです。

さらにもう一つの理由は、会員や出品者の皆さんとの触れ合い、その中でも個性豊かな主体関西作家展の方々との触れ合いが毎回新鮮で楽しいことです。

丹波の片田舎に住む私にとって美術作家との触れ合いはそれほど多くは無く、主体本展の巡回展や主体関西作家展の準備やその後片づけの後の食事の会などで、主体美術として、一人の作家として、時にはオブラートに包みながら、時には歯に衣着せぬ発言で、作品に対する熱く純粋な思いを聞くことは今までに体験したことのない出来事でした。

今なら「パワハラ」だと訴えられるような発言もマゾっ気の有る私にとっては鳥肌が立つほど嬉しい励ましの言葉となり、次の制作への糧となるもので、これから先もこの恍惚の刺激を求めて主体展に出品し続けたいと思います。

加藤紀久子（東京都）

主体展との出会いは、私が文京区の中学校に通って居た頃、会員の故･磯村敏之先生が絵の教師として赴任して来られたことに始まります。楽しい思い出の多々ある美術の授業でした。その後私が社会人となってから、先生より毎年の主体美術のご案内を頂く様になり、以後長年に渡り、都美術館で主体展の大作を見させて頂きました。やがて子供達が成長した頃、絵を鑑賞する立場から制作して出展させて頂く事になり、現在に至って居ります。

私がモチーフである牛達をえらんだ訳は、現在住む街、西東京市（田無市と保谷市が合併）に東大農場があり、1968年より乳牛60頭を飼育し「東大牛乳」を生産していたと知った事がきっかけです。その後1988年からは黒毛和牛が放牧されたそうです。或る日、牧場と演習林のある農場を見学に行ってみると、広大なフィールド（敷地は東京ドームの約5倍）にポプラ並木やサイロ、牛舎のある緑の風景の中で伸び伸びと走り回る黒牛達を見て、「東京にもこんな風景があるのだ」と感動し、これを大きなキャンバスに描きたいと思いました。好奇心の強い牛は牧場に行くと皆寄ってきて、特に仔牛は人なつこく服を引っ張ったり舐めたりして、私はその黒い瞳の虜になってもうメロメロでした。主体展に牛の絵を出品して10数年になりますが、途中で牛達は東大茨城農場に移されてしまい居なくなりました。寂しさとショックで絵が少し変化した事もありましたが、今でも牛の情報があれば出来るだけ会いに行きます。牛は人との関わりが最も深い動物であると考える私は、自分のキャンバスの中でこれからも牛達と向かい合っていきたいと思って居ります。

鳩貝　悦子（千葉県）

その昔、私は東京から千葉県の流山市に移り住み、しばらくして個人で教えている絵画教室に三人の女性達といっしょに通っていました。市の展覧会に出品しながら楽しく絵を習っていたのですが、ある時その先生は絵では食べて行けないのと、不真面目な生徒を教えても時間の無駄を理由に地元の大病院の守衛職に就職され、私達は突然お教室をクビになってしまいました。そんな時に偶然にも主体美術の会員であった、故塩流水功先生と出会い、先生が顧問をされていた同好会、「虹の会」に入会しました。

主体美術がどんなところかも全く知りませんでしたし、まだ仕事優先の時期だったこともあり、忙しさを理由に同好会へ持って行く作品もないままいつも手ぶらで出席することばかりでした。散々ご迷惑をおかけした先生がお亡くなりになった後、先生の奥様に、「鳩貝さんが最後の生徒でした。」と言われて何とも情けない自分に嫌気がさし、何とか絵を続けようとカルチャースクールを転々とするジプシーの日々を送ることになってしまいました。それでも恐れ多くも将来は塩水流先生の所属していた公募展に出品するしかないと思っていたのですから、今思い返すとゾッとします。数年後、何とか初入選はしたものの会員及び他の出品者とのレベルの違いに愕然とさせられました。

特に驚かされたのは会場での会員の方々の迫力ある作品でした。入選の喜びも束の間、レベルの差で落ち込んでいたところ、「ちば主体展」のお誘いをいただきました。そこで毎年「ちば主体展」を通して沢山の会員、出品者の方々との交流をして行くうちに、こんな私でも絵を描く意欲が湧くようになりました。

あれから15年、絵についてはきっとこれからも失敗の連続で自己嫌悪に陥ること間違いなしでしょう。それでも最近では想像を巡らせ描くことに魅了されるようになったことは、きっと主体美術には何かドキドキするような魔法があるのではないでしょうか。

不思議なご縁の塩水流功先生と主体美術協会との出会いは私にとって絵を描くという素敵なライフワークを授かり、そして今年も主体美術に出品できたことはなんてラッキーな私でしょう。

展覧会記録

2019年8月～2020年1月末

■第52回主体美術秋田作家展
8月1日～8月4日
秋田さきがけホール（秋田市）

■森 芳雄と仲間たち
8月3日～11月24日
世田谷美術館（世田谷区）

■脈・FUKUSHIMA2019展
（山田礼二、横井薫、大橋美保 他）
8月7日～8月11日
福島文化センター（福島市）

■第34回日本の海洋画展
（佐藤善勇、手塚國彦、中村輝行 他）
8月21日～8月28日
東京芸術劇場5F展示ギャラリー（豊島区）

■EXHIBITION by ZERO!
（井上樹里、柿崎覚、坪井健一、中嶋修、新島知夏、橋本礼奈、山本靖久、他）
8月26日～9月1日
あかね画廊（銀座4）

■横井薫個展
8月28日～9月22日
羽山の森美術館（福島県川俣町）

■2019DADA展（岩井啓二 他）
9月2日～9月7日
シロタ画廊（銀座7）

■和田貴子展
9月2日～9月7日
画廊宮坂（銀座7）

■exhibition twice up! Ⅲ part1
（井上樹里、久我英輔、新島知夏）
9月2日～9月8日
あかね画廊（銀座4）

■第41回北海道ロビー絵画展
（齋藤典久、佐藤善勇、續橋守 他）
9月5日～9月11日
ギャラリー絵夢（新宿3）

■アヴァンギャルド画家たちの東京
（大野五郎、末松正樹、寺田政明 他）
9月7日～10月6日
板橋区立美術館（板橋区）

■金オーロ遊び展（斎藤望、種倉紀昭 他）
9月8日～9月29日
アートスペース泉（福島県いわき市）

■exhibition twice up! Ⅲ part2（上野信彦、大西佐頼、福田和幸、前山陽子）
9月9日～9月15日
あかね画廊（銀座4）

■ひぐらし展
（迯町勝治、畠理弘、水村喜一郎 他）
9月24日～9月29日
画廊山河（北区上十条1）

■そ・れ・ぞ・れ・の今展Ⅱ（田中和枝 他）
10月1日～10月14日
フォレスタヒルズ2Fロビー（豊田市）

■鈴木遊展　ー自然と共にー
10月2日～10月7日
鶴見画廊（横浜市鶴見区）

■〈象の内・外〉2019（長沢晋一 他）
10月7日～10月16日
ギャラリー絵夢（新宿3）

■柿崎覚油絵展
10月10日～10月16日
渋谷東急本店8階美術画廊（渋谷区）

■廣瀬栄子・斎藤孝恵二人展
10月14日～10月19日
画廊るたん（銀座6）

■岩部晴子展
10月21日～10月27日
銀座煉瓦画廊（銀座4）

■第1回 石ころのそれぞれ展
（関谷昌夫、大口満 他）
10月25日～10月28日
大島画廊（新潟県上越市）

■第75回記念ハマ展
第1会場：10月30日～11月11日
横浜市民ギャラリー（横浜市）
第2会場：11月15日～11月27日
赤レンガ倉庫1号館（横浜市）

■草莽の風展（松本恵美 他）
11月4日～11月9日
銀座Ksギャラリー（銀座1）

■〈 風土 〉に生きる・Ⅵ（柏木喜久子 他）
11月4日～11月9日
ギャラリー風（銀座8）

■時のかたち小品展
（中嶋修、結城智子 他）
11月4日～11月16日
ギャラリーセイコウドウ（銀座1）

■KOMAYA ART PROJECT 2019
（宮林さわ子 他）
11月16日～11月24日
二川商家駒屋全館（豊橋市）

■子どもへのまなざし（山本靖久 他）
11月16日～1月5日
東京都美術館 ギャラリーA・C

■多摩北部5市美術家展（加藤紀久子、桑原雄一、小松博映、中村輝行 他）
11月22日～11月28日
西東京市南町スポーツ・文化交流センターきらっと（西東京市）

■7人展
（中村陽子、平田 誠、藤原アツ 他）
11月27日～12月3日
鶴見画廊（横浜市）

■2019「内在する日常展」Ⅶ
（荒木篤子 他）
11月28日～12月3日
Art Space 88（国立市）

■第26回丸沼芸術の森展
（山本靖久 他）
11月29日～12月8日
丸沼芸術の森展示室（埼玉県朝霞市）

■華・華・展（松本恵美 他）
12月日2～12月7日
ギャラリー風（銀座8）

■白と黒の間に展（柏木喜久子 他）
12月2日～12月7日
ギャララリーGK（銀座6）

■闇展Ⅳ（井上樹里、小林宏至 他）
12月9日～12月15日
あかね画廊（銀座4）

■第25回025の会展
（宮本圭子、吉江新二 他）
12月9日～2月15日
ギャララリーくぼた4F（京橋2）

■齋藤典久展
12月9日～12月21日
ギャラリー・オカベ（銀座4）

■山本靖久展
12月16日～2月25日
ギャラリー アルトン（南青山）

■大口満絵画展（油絵・水彩）
12月21日～12月25日
京都教育文化センター（京都市）

2020年

■燁々展
（有馬久二、黒川洋、佐藤善勇、手塚國彦）
1月6日～1月12日
銀座アートホール1F（銀座8）

■山口長男☆野見山暁治と実専展
（長沢晋一 他）
1月6日～1月12日
銀座ギャラリー ムサシ（銀座1）

■藤田俊哉個展「花・色・形」
1月12日～2月2日
d-labo静岡（静岡市）

■新春ガラス絵展（浅野修、中城芳裕、中村輝行、山本靖久 他）
1月13日～1月18日
ぎゃらりー サムホール（銀座7）

■第５回絵画・平面の未来展
（福田和幸 他）
1月13日～1月18日
ギャラリー暁（銀座6）

■かみのしごと（山本靖久 他）
1月13日～1月19日
あかね画廊（銀座4）

■PREMIER STAGE展
（柏木喜久子、高橋玲奈 他）
1月15日～1月23日
ギャラリーSTAGE-1（銀座1）

■浅野修（虚と実）展
1月15日～1月25日
銀座Ksギャラリー（銀座1）

■主体展秀作作家（2019）と会員小品展
1月16日～1月27日
ヒルトピア アートスクエア（新宿）

■現代茨城作家美術展
（福田玲子他）
1月18日−2月9日
茨城県近代美術館（水戸市）

■フェノメナ20最終展
（柏木喜久子 他）
1月20日～2月1日
始弘画廊（南青山5）

■長沢晋一展
1月27日～2月1日
あらかわ画廊（銀座1）

■オノ・ミチ・ヒロ展
1月29日～2月2日
三重画廊（三重県津市）

■M-art'79展（山﨑 弘 他）
1月27日～2月1日
画廊宮坂（銀座7）

※展覧会案内状を機関紙担当（山田）、ホームページ担当（長沢）にお送りください。（会員・出品者問わず掲載いたします）

2020年度事務局体制

■責任者／福田玲子　■会計／齋藤典久
■展覧会／結城智子・薗田雅俊　■研究／榎本香菜子・井上樹里
■広報／【図録・出版】桑原雄一・久我英輔　【機関紙】藤田俊哉・山田礼二
【発送】柿崎　覚　【広告】黒川　洋
◆巡回展／名古屋：水谷幸子　京都：森　慎司　◆ホームページ／長沢晋一

2020年 第56回主体展　日程

本　　展／東京都美術館（上野公園）
2020年9月1日（火）～9月17日（木）16日間（7日は休館）
公募搬入／2020年8月22日（土）・23日（日）東京都美術館地下3階
京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階南
2020年9月29日（火）～10月4日（日）
名古屋展／愛知県美術館8F
2020年10月13日（火）～10月18日（日）
※研究会等詳細はホームページにて。

東日本震災遺児教育資金への寄付のお願い

主体展会場で販売した機関紙の売上金は、**公益財団法人「みちのく未来基金」**へ寄付いたします。今年もご協力をよろしくお願いします。

【団体名】 **公益財団法人みちのく未来基金**
【所在地】宮城県仙台市泉区八乙女中央5丁目10番8号 八乙女ユナイトビル2F
【電話】022（343）9996　【FAX】022（343）9997
【E-mail】 info@michinoku-mirai.org

編集後記

■55回展では8名の新会員が誕生しました。世代や作風もさまざまな新メンバーが、新風を吹き込んでくれる事を願います。そして新装なった京都市京セラ美術館。クラシックとコンテンポラリーの融合した建物は、新たな京都の顔になるか?!　私は今年の京都展が本当に楽しみです。　（藤田俊哉）

■2019年は自然災害の多い年でした。2月の北海道胆振地方の地震、8月の九州豪雨、9月の台風18号、10月の台風19号など。未だにその被害から復旧していない地域も多くあります。毎年大きな災害が起こるのは避けられないとして、想定以上の備えができているでしょうか。半年後のオリンピック・パラリンピックが何事もなく無事に終了することを祈ります。　（山田礼二）